

京都の躰を語る女性の会会報

おはようさん

第六号

わたしたちは躰という言葉
いささか古びた言葉
を持ち出し伝統と文化の
町京都において今も息
づく「躰」や「訓え」に
学び語ることから古く
て新しい子育て文化を
提唱します

京都の躰を語る女性の会

〒616-0022

京都市西京区嵐山朝月町68-8

京都府神社庁内

TEL075-863-6677

FAX075-863-6665

<http://www.net-k.co.jp/situke>

situke@net-k.co.jp

例会は

初天神さん



大修理を終えた北野天満宮ご本殿

でも正月の縁日は初天神、師走の縁日はしまい天神といわれ、とりわけ多くの人で賑わいます。この日も朝から雨がそぼ降る生憎の天候にもかかわらず大勢の方がお参りされました。

北野さんの

ご造営

さて、北野天満宮はただ今平成十四年に迫る大萬灯祭に向けて、国宝の御本殿の大修理を行っておられ、今回はその修理風景も見せていただけるとあって多くの参加者が集いました。集合の後先ず仮に大神様をお祀りしてある仮殿に正式参拝、その後無事修復を終えた御本殿の周りを回りながら、本日の講師でもあり、この檜皮葺屋根を工事された檜

皮葺職人の宮川友一氏より、檜皮葺き屋根の解説を伺いました。昼食の後北野天満宮の梶宮司様よりご挨拶を兼ね御由緒のお話を伺い、再び外へ。二班に分かれ宝物殿と、修理中である国宝の御本殿内に入らせていただき、普段宮司様以外に入ることの許されない場所まで特別にご案内を頂き、一同感激一入の様子でした。

また、講演会として午前中解説いただいた宮川友一氏から、文化財を護ることや伝統技術を次代に伝えていくことの難しさを、身振り手振りを加えながらユーモアたっぷりにお話を頂き、参加者はずいぶんお話しに引き込まれ、あつという間に時の過ぎた楽しい講演会でした。

ご本殿へ続く参道は工事中でした



参加者は、天神様の新しいお住まいをじっくり拝見できた感激を胸に、まだまだ賑わう天満宮を後に致しました。

去る一月二十四日、当会の「お正月の催し」が初天神の参拝客で賑わう北野天満宮において開催されました。天神様の縁日は毎月二十五日。中

今年二回目の例会は、俳優渡辺文雄先生のお話をお聞きしました

ちかごろ気になる躰の話

六月三十日 石清水八幡宮

八幡宮の「水無月の大祓式」に
参列させていただくとの内容で
した。



お話を頂いた俳優の渡辺文雄氏

今年第二回目となる当会の催し
が、去る六月三十日石清水八幡宮
を会場に開催されました。今回
の催しは、提言者のお一人である
今井貴美子さんの肝煎りで実現し
た企画で、テレビや映画でお馴染
みの俳優渡辺文雄さんをお招
きしての講演会、そして石清水

午後一時、会員その他約五十
名出席の下、渡辺さんの講演が始
まりました。渡辺さんはちょうど
福井県内で「遠くへ行きたい」の
ロケがあり、その帰りにわざわざ
八幡市まで足を延ばして戴きご講
演いただきました。お話の主題
は、「ちかごろ気になる躰の話」と
いうことで、昨今ご自身がお感じ
になられている若者の問題行動や
無秩序すぎる社会状況などについ
て、非常な危機感をお感じになら
れておられ、これでは日本はダメ
になる、古き時代の厳しい躰を見
直さねばと訴えられました。さす
がにお仕事で日本全国津々浦々を
旅され、数え切れないほどの人々
とふれあい、語らっておられるだ

けに、その豊富な経験に裏打ちさ
れたお話は、機知に富みとても含
蓄のある、そして楽しいお話でし
た。講演後も、会員から「もっと
お話を聞きたい」との強い要望か
ら、お茶休憩の一時にも会員と同
じテーブルにおつきいいただき、お
抹茶とお菓子をいただきましたながら時
間ぎりぎりまでおつきあいをいた
できました。



提言者の今井貴美子氏

水無月の
夏越しの祓いする人
は
千歳の命
延ぶというなり

さてその後午後三時から、
会場である石清水八幡宮の水無
月の大祓式に参列させていただ

きました。参道には木津川の茅で
作られた大きな茅の輪が設置され
ており、神職さんのあと私たち会
員も崇敬者の方々に混じって茅の
輪くぐりを体験させていただきました。

大祓式に参列し、半年間の罪穢
れをきれいサツパリ大川に流し去
り、残る半年を元気に過ごせるよ
う皆で八幡さまにお祈りし山を下
りました。



大祓式での茅の輪（石清水八幡宮）

シリーズ 京職人の伝統と技

有職翠簾・みす平さん

みす平

京都市下京区寺町通り仏光寺北入る

075-351-2749

寛政初期創業。宮内庁はじめ全国の官国幣社、各宗本山御用達の翠簾を手がける。良質の材料にこだわり、伝統の技を今に受け継ぐ。

道具を受け継ぐことは 職人の心を教わること

今回は、創業が寛政年間の初期という、有職翠簾師の老舗・みす平さんをお訪ねしました。敷居をまたげば、中には昔ながらの土間と畳の空間が広がります。作業場中央には制作中の御簾が吊され、生地や総、道具や竹材などが整然と出番を待っているかのようです。「思い切つて築百三十年の家屋を五階建てのビルに立て替えたんですよ」、そうお聞きして初めて真新しい建物の中にいたことに気付いたほど、そこには不思議

な時間が流れていました。

■道具の使い方 身体で覚えた幼年時代

平八さんは昭和三十三年生まれの八代目。「子どもの頃から道具を使い、父や職人さんの仕事を見て育ちました。針に糸を通すだけでも立派なお手伝いだったんです。」土間の掃除をしても百点を採つて来ても、おじいちゃんから十円のおだちん（ごほうび）がもらえたという小学生時代、仕事場にあった竹や鋸、小刀を使って弓矢をこしらえ、庭で飛ばして遊んだといいます。けれども竹を切る鋸で他の木を切ったりすれば大目玉。すぐさま竹尺がピシッと飛んできました。道具は職人の命。鋏ひとつにも糸切り鋏、竹切り鋏、紙切り鋏…と用途の数だけ鋏があります。「竹を切る鋏は刃と刃を寄せながら切る技と力がいらいます。だから今ではもうマメの上にはマメができてこんな固くなつてしまいましたよ」と、右の掌を見せて下さいました。道具にはまた、ひとつひとつ使い方のルールがあるということ、無条件にたたき込まれたのもこの時期だったのでしょうか。こう

して家業について特に意識するでもなくごく自然に受け入れながら、平八少年は真竹のごとく真つ直ぐに成長していききました。



大切な記録を見せて頂きました

■あの時の父のつぶやきが 今の仕事を支えてくれている

高校に上がるとお手伝いの内容に変化が現れました。「荷造りなどの力仕事は、私が学校から帰る時間までわざと置いてあつて、帰る早々紐を引っ張る役回り。それに、お出入りの神社で催事があるたび、手伝いに借り出されたりもしました」。当時平八さんは、春日大社の五十八回目の遷宮（本殿建て替え）を体験されています。七代目の手

によりできあがった御神宝の御簾。仕上げの金具を取り付ける作業をする中で、父は、「この箔は何処何処の誰々がやったんや」と、御簾の裏にいる息子に話しかけるでもなく、独り言のようにいろいろな事を聞かせたといいます。そして二十一年の時が流れ平成十年、八代目のもとに同じ仕事を手がける機会が訪れました。その時平八さんの脳裏には、あの時の父の言葉がひとつひとつ鮮明に甦つてきたといいます。そこには押しつけではない、さりげない父親の教えが存続していたのでした。

卒業後は本格的に職人の道を歩んだ平八さん。大学への進路を思い留まるのにもそう大きな抵抗もなく、また不満も持たなかったそうです。普通の御簾でも一人前まで十年かかるといわれるこの世界。有職翠簾ともなれば、さぞかし奥が深いのでしょうねとの問いに、「翠簾づくりは日本の文化やしきたりを学ぶことから始まります。うちは代々、使う竹も京都は亀岡産の真竹にこだわり続け、匠の技と心を受け継いできました」ときつぱりと答えると、ひとつの古い将棋盤を引き寄せました。



前田平八商店ご主人

■三代目から使ってきた、一本足の将棋盤
「これがないと仕事にならないんです」

これがないと仕事にならないという古びた将棋盤は、なぜか一本足でした。代を重ねるうちに、一本また一本と抜け落ちてしまったとか。何に使うのですかとお尋ねすると、言うより早いとばかりに実に手際よく実演して下さいました。

先ず、盤を裏返すとその一本足に朱の紐を掛け、左右に持った紐をささつと組んだかと思うときれいな蝶結びができ上がりました。今度は表に返した盤の縁に細長く裁断された生地を当てて、しゅしゅつと滑らせる動作を三度くり返します。すると長く真っ直ぐな折り目が三本ついていました。それはまるで手品を見ていたかのような手早さです。「三代目の頃からずっと使われてきた骨董品です」なるほど、縁のすり減り具合や足の艶が、年月の長さを物語っています。御簾を巻き上げる紐や縁取りの生地も全部制作の工程に入っていることを意外に思っていると、「生地の型刷りや総作りなど、うちの作業は他にもあります。以前はそれぞれ専門家がいて分業だったんですが、高齢化と後継者の問題が深刻化し、今では自分のところで賄えるものは吸収するようにしています」ということでした。

「近頃ではお客さんの意識も変わってきています。宮司さんにしても何処の店で作った翠簾なのかというこだわりもなく、コストのことだけを気にする方が増えてきたようです。」



まさに本物志向が希薄な時代。それゆえなおさら匠の技を守り残さねばという思いが強まるのかもしれない。

また、少年野球の監督をされている中で、自己中心的な子どもが増えたことを日々痛感されており、それは決して高学年の子どもに限ったことではなく、むしろ幼稚園児の段階から始まっていることが残念ということでした。「核家族の最大のデメリットは、親が尊敬する人(お年寄り)が家にいないことでしょう。昔は厳しい躰とともに感謝することを身につけさせられました。「ありがたい」とか「おかげさんで」、それが自然に口に出る時代でしたから。」ごほうびの十円玉やお父さんのやさしさが、今も平八さんの中にいっぱい詰まっています。

京のなぜ？

京の建て替えとは

京都の六月は夏を迎えるにあたり、ひと汗もふた汗も流さなくてはなりません。それが「建て替え」です。正しくは「建て具替え」ですが、「建て替え」と云われる方が多いのです。でも近頃では、されないご家庭も増えて来て、家を建て替えることと勘違いされ、淋しい思いです。

襖、障子を葺戸、御簾に替え、畳の上には、網代、籐蓆を敷きます。お座敷蒲団は夏物、暖簾、スリッパ、食器類も涼しげな物に替えるのです。しかもこれらを一日で行うことに、精神的効果があるのです。

京都では、冬よりも、いかに夏を涼しく暮らすか。どうしても逃れることが出来ない暑さなら、逆にその暑さを理由におしゃれに楽しんでしまおうとまで思わせる先人の知恵なのです。

マンションでも、簾、風鈴、藤の玄関マット、スリッパ等でも涼が取り込めます。なけなしの風でも、目にも涼しくしてくれるのが、絹の暖簾なのです。

大文字 今井貴美子